



現代文明國ニ於ケル人口問題(3)

米田, 庄太郎

(Citation)

經濟學商業學國民經濟雜誌, 10(2):223-242

(Issue Date)

1911-02

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00051676>



現代文明國ニ於ケル人口問題 (其三)

京都文科大學講師

米田庄太郎

一、人口出生率減少問題、

- (1) 出生率減少ノ事實、
- (2) 出生率減少ノ原因、
- (3) 出生率減少ノ傾向ト人種改善政策、

二、都市集中問題、

- (1) 都市集中ノ事實、
- (2) 都市集中ノ原因、
- (3) 都市的淘汰作用、
- (4) 政策問題、

一、人口出生率減少問題

- (3) 出生率減少ノ傾向ト人種改善政策

前二項ニ於テ論ゼシ如ク現代文明國ニ於ケル出生率減少ノ傾向ハ現代文明ノ發達ト相伴ナフテ進行シ、而シテ其根本的原因ハ現代文明ノ精神ニ在リトスレバ現代文明ノ益々汎ク普及シ且ツ發達スルニ隨フテ此傾向モ亦愈々増進スルモノ

ト推斷セザルヲ得ザルナリ。而シテ此傾向ニハ死亡率減少ノ傾向ニ於ケルガ如ク一定ノ自然的限界ナキヲ以テ現代人ハ遂ニハ全然出生ヲ禁遏スルニ至ルヤモ計ラレズトノ懸念ヲ起セル人々モ少ナカラズ。サレド現代文明ノ發展ニシテ甚ダシク正調ヲ失シ、不正常的^{アブノル、ネグレイ}的狀態ニ陷ルニ非ラザル限りハカ、ル極端ナル結果ヲ生ズルコト萬々之レナカル可シトハ余ノ固ク信ジテ疑ハザル處ナリ。余ガ現代文明ノ精神ト認ムル三種ノ要求即チ自由發展、自由活動及ビ自由享樂ノ要求ガ正當ナル順序ニ於テ、又順當ナル均衡ヲ保持シツ、發動スルニ於テハ出生率減少ノ傾向ニハ自カラ一定ノ限界成立シ、決シテ出生全遏ノ現象ヲ起スニ至ラザル可シト思フ。サレド若シ此等三種ノ要求ノ何レカガ殊ニ自由享樂ノ要求ガ他ノ要求ニ對スル均衡ヲ敗リテ病的發動ヲ起スニ至ランニハ出生全遏ノ現象現ハレ來ルヤモ計ラレズ。而シテ出生率減少ノ傾向殊ニ強キ國ニアリテハ既ニ今日ニ於テモ此要求ノ病的發動現ハレ居リ且ツマス、增長スルノ恐レナキニシモ非ラズ。而モカ、ル病的發動ハ僅カニ其萌芽ヲ發スルニ過ギザル今日ニ於テスラ痛ク輿論ノ非難ヲ受ケ居ルコトナレバ他日若シ一層大ニ發展センニハ強大ナル倫理的反動ヲ惹起

シテ自カラ減退スルニ至ラン。サレバ此病的發動ノ爲メニ出生全遏ノ現象起リ來ルコトハ斷ジラ之レナカル可シト信ズ。更ニ子ニ對スル愛ト云フ一種比類ナキ愛情ヲ充足セントスル欲望自己ノ生命財産ヲ傳フ可キ後裔ヲ求ムルノ念等ハ決シテ消滅スルモノニアラザル可ケレバ、現代文明ノ發達ニ從フテ出生率減少ノ傾向如何ニ強マリ行クモ、全然出生ヲ禁遏スルマデニ至ルコトハ斷ジテ之ナカル可シト思フ。然ラバ此傾向ハ如何ナル點マデ進ミ行キ、如何ナル點ニ於テ停止ス可キカ。今來一家族ニ於ケル兒童ノ數ハ如何程デアル可キカ、即標準家族ノ兒童數ハ如何程ニ定ム可キカト云フ問題ハ世ノ注意ヲ惹起シ來リ、二兒制ヲ主張スルモノ、或ハ三兒制或ハ六兒制ヲ唱フルモノアリテ異說紛々タルガ、之レ即チ出生率減少ノ傾向ハ何レノ點ニ於テ制限セラル可キカト云フ問題ヲ他ノ方面ヨリ考察スルモノニ外ナラザルナリ。而シテ此等諸主張ノ内ニテ二兒制說ハ最モ汎ク行ハル、ガ如シ。サキニモ述ベシ如クユンマンダー夫人ノ調査ニヨレバ米國ニ於テ此問題ニ關シテ上下ニ通ジテ行ハル、理想ハ二兒制ナルナリ。而シテ此主張ガ通例 *Zweikin-* *der System* ト云フ獨逸語ニテ知ラル、ニヨリテモ察セラル、如ク之レ獨逸ニ於テ

モ亦汎ク行ハル、理想ナルナリ。更ニ佛國ニ於テハ一兒制ヲ理想トスル潮流大ニ増進シ來レリト云フ。ゾラノ小説 *La Fécondité* ノ内ニハ今ヤ佛國ノ上流及ビ中流社會ニ於テ一兒制ノ理想ガ如何ニ大ナル勢力ヲ振ヒツ、アルカハ面白ク描寫サレ居レリ。サレド一兒制又ハ二兒制ハ決シテ良好ナル制度ニ非ラズトテ大ニ之ヲ非難スル人々モ少ナカラズ。其說ニ曰ハクカ、ル小家族ニ於テ養育サレタルモノ、中ニハ其精力及ビ性格ニ於テ平均以下ニ下ルモノ一般ニ多ク、更ニカ、ル家族ハ不具又ハ病弱ナル兒童ヲモ非常ニ大切ニ養育シ自然的過程ニ從ヘバ當然死滅ス可キモノモ無理ニ保存スルヲ以テ遂ニハ一般ニ國民ノ精力元氣ヲ低減スルニ至ル可シ。故ニ標準家族ノ兒童數ハ二兒ヨリ三兒マデノ間ニ定ム可キモノニ非ズシテ四兒ヨリ六兒マデノ間ニ定ム可キモノナリト。サレド余ノ考フル處ニヨレバ一家族ニ於テ養育サル可キ兒童數ハ一般的ニ規定セラル可キモノニ非ラズ。其一兒ナル可キカ、二兒ナル可キカ、或ハ六兒又ハ其以上ナル可キカハ、先ヅ第一ニ其家族ノ資力ニヨリテ決定セラル可キモノナリト信ズ。余ハ此主張ヲ假リニ資力主義ト稱シ置カン。今自己ノ發展、活動及ビ享樂ヲアマリニ損傷スルコトナクシテ、六人或

ハ其以上ノ兒童ヲ立派ニ教育シ得ル資力ヲ有スルモノハ、宜シク六人又ハ其以上ノ兒童ヲ養育ス可ク之ニ反シテ若シ自己ノ發展活動及ビ享樂即チ三種ノ現代文化的要求ヲ甚シテ損傷スルニ非ラズバ二人以上ノ子ヲ立派ニ教育スル能ハザルモノハ斷然二兒ニ制限ス可キモノナリト思フ。カ、ル資力ノモノガ三人四人或ハ其レ以上ノ子ヲ舉ゲ甚ダ不完全ナル養育ヲ施シテ其中ヨリ或ハ不徳者犯罪者ヲ出シ、或ハ身體虛弱ニシテ自活ノ力ナク兄弟親族ノ厄介トナルカ然ラザレバ公共團體ノ慈善ニ依頼セザル可カラザルガ如キモノヲ出スハ決シテ國家ニ忠ナル所業ト云フ可カラズ、否ナ之レ國ヲ害シ世ヲ賊スルモノ、人道上免ス可カラザル罪惡ナリ。更ニ余ハ惡疾遺傳ノ恐レアルモノ、又ハ健全ナル子ヲ産ムノ見込ナキモノハ斷然出生ヲ禁遏シテ一子ヲモ舉ゲザラムコトガ國家ノ爲メ、人類ノ爲メナリト信ズルナリ。

夫レ舊文明ニアリテハ過去ノ爲メニ全然現在ヲ犠牲ニ供シ、現在ハ唯過去ヲ反復シテ之ヲ將來ニ傳フルニ過ギザルモノ、又唯此ノ如キモノトシテ意義アルノミノモノト觀念セラレタルナリ。或ハ現世ハ唯來世ノ準備又ハ試驗場トシテ意義ア

ルノミノモノト考ヘラレタルナリ。何レニシテモ現在、現世ハ其レ自身獨立ノ存在ト價值ヲ存スルモノトハ認メラザリシナリ。然ルニカ、ル思想トハ正反對スル見地ニ立チ、現在ニ對シテ獨立ノ存在ト價值ヲ認メ、又其自身持有ノ要求ヲ持スルモノナルヲ許シ、隨フテ過去ヲ抑ヘテ大ニ現在モ重ンズルハ、即チ現代文明ノ大特徵ナリトス。現在ハ唯過去ヲ繰リ返シ或ハ全然過去ニ支配サル可キモノニ非ラズ、更ニ又將來ノ爲メニ全然犠牲ニ供セラル可キモノニモアラズ、己レ自身ニモ獨立ノ存在ト價值ヲ有シ、己レ自身ノ要求ヲ有スルモノナルコトヲ主張スルハ現代文明ノ顯著ナル一特徵ナルナリ。現代人ハ唯過去ノ影タルヲ欲セズ、過去ヨル解放セラレ過去ヲ以テ唯現在ノ順備ニ過ギザルモノト見、而シテ現在ニ生キテ、將來ニ自己ノ生命(祖先ノ生命ニ非ラズ)ヲツナガントスルモノナリ。然リ而シテ之レツマリ人格ノ自由發展、自由活動及ビ自由享樂ト云フ現代文化的三大要求ノ發動ノ結果ニ外ナラザルナリ。

然ルニ今現在ニ獨立ノ存在及ビ價值ヲ認メ、又現在ハ夫レ自身ノ要求ヲ有スルモノトセハ其將來ノ爲メニ用ユル、或ハ犠牲ニ供スル力ノ分量ハ自カラ減少セザ

ルヲ得ズ。更ニ現在ガ將來ニ傳ヘントスルハ強烈豐富ニシテ充實セル生命ナレバ之ヲ承ク可キ將來ハ又强健優勝ナルモノナラザル可カラズ。換言セバ現代人ハ先ヅ自己ノ人格ノ發展、活動及ビ享樂ヲ要求シ、自己ノ生命ヲシテ出來得ルダケ強烈豐富ナラシメントスルモノナレバ自カラ子孫ノ爲メニ犠牲ニ供ス可キ力ノ分量ヲ減少セザルヲ得ズ。更ニ其子孫ニ傳ヘントスル生命ハ自己ノ強烈豐富ナル生命ナレバ之ヲ承ク可キ子孫ハ出來得ルダケ强健優勝ナルモノナラザル可カラズ。是ニ於テカ現代人ハ其子ノ質ヲ大ナラシメ爲メニ、其數ヲ制限セザルヲ得ザルナリ然リ而シテ同ジク現代人ト云フモ其資力ニハ種々ノ差等アリ。十人ノ子ヲ適當ニ養育シテ尙ホ餘力アルモノアレバ、又唯一人以上ハ適當ニ養育スル能ハザルモノアルナリ。サレバ一家ノ適當ニ養育ス可キ兒童數ハ其ノ家ノ資力ニ應ジテ夫レ夫レニ決定セラル可ク一定ノ標準數ヲ立テ、之ヲ律ス可キモノニ非ラザルナリ。

然ルニ今ヤ此資力主義ノ實行ニ對シテ一大障礙ハ起リ、且ツ其力ハ日々ニ増大シツ、アルナリ、是レ即チ女子ノ人格的發展ナリ。現代文明ハ女子ニ於テモ亦三大要求ヲ發達セシメツ、アルナリ。而シテ女子ニ於テ此等三大要求ノマス、發達

スルコトハ出生ニ制限ヲ加フル甚ダ重大ナル勢力トナリ、此クテ一家族ニ於ケル出生ノ數ハ其家族ノ資力ノ許ス程度ヨリ以下ニ制限セラル、危險ハ起リツ、アルナリ。殊ニ自由享樂ノ要求女子ニ於テ病的ニ發動スルニ至ラバ出生ハ全然禁遏サルルヤモ計ラレザルナリ。併シサキニ述ベシ理由ニヨリテカ、ル極端ナル結果ハ萬萬起ルコトナカラシムガ、免ニ角出生問題ニ對スル女子ノ態度ハ今ヤ甚ダ重要ナルモノトナリ來レリ、從來一家ノ兒童數ハ主トシテ夫ノ財囊ニヨリテ決定サレタルモノナルガ、今ヤ之ヲ決定スル主要勢力ハ妻ノ意向トナラントシツ、アルナリ。サレバ現代文明國民ノ將來ノ運命ハ女子ノ手ニヨリテ決定セラル、モノト云フ可ク、女子教育ノ必要實ニ大ナリト云ハザル可カラズ。

以上述べ來リシ處ニヨリテ余ハ現代文明ノ發達ニツレテ出生率ハマス／＼減少スルナランガ、而モ自カラ一定ノ限界成立シテ決シテ極端ナル結果ヲ生ズルニ至ラザル可シト考フ可キ理由ヲ明ニシタリト信ズ。サレド此傾向ノ發展ハ早晚現代文明國ノ人口ノ絶對的減少ヲ生ズ可キハ疑フ可カラザル事實ナリト思フ。千九百七年佛國ノ人口狀態上ニ起リシガ如キ現象ハ未ダ他國ニ現ハレザルノミナラ

ズ、獨逸ニ於ケルガ如ク出生率ノ減少シ行クニ係ラズ死亡率ノ減少一層大ナルガ爲メ、尙ホ人口總數ハ年々著シク増加シツ、アリト雖モ、而モ出生率減少ノ傾向ノ連續的發展ハ早晚先ヅ増加率ノ減少ヲ起シ、遂ニハ絕對數ノ減少ヲ生ズルニ至ル可キハ明白ナリト信ズ。サレバ此傾向ノ發展ニヨリテマルサス以來學者爲政家ノナイトメーアタリシ人口過多ノ起リ來ル恐ナキハ確實ニ承認サレ而シテ其反對ノ現象タル人口減少ノ起ル可キ徵候現ハレ來レルヲ以テ、隨ツテ又今ヤ識者間ニハ從來トハ正反對ノ憂悞發生シ來レリ。卽チ人口減少ヨリ生起スルナラント推察サル、種々ノ害惡ニ對スル憂悞之レナリ。サレド人口減少ハ果シテ其レ自身ニテ害惡ナルカ又人口減少ヨリ生ズル一切ノ結果ハ總テ有害ナルカ。然リト答フニハ世ノ一般ノ論者ノ通說ナレド余ハ此問題ニシテカク單純ニ解答サル、モノニ非ラズト信ズルナリ。

夫レ人口ノ減少其物及ビ其結果ガ人類ノ將來ニ及ボス影響如何ヲ推知センニハ減少ノ形質の方面、度合及ビ速度等ノ諸方面ヨリシテ之ヲ精細ニ考究セザル可カラズ。サレド余ハ茲ニ之ヲ詳論スル暇ナキヲ以テ唯其主意ダケヲ述ベ置カンニ

先ヅ形質の方面ニ付テ考フレバタトヒ人口ノ増加甚ダ大ナルモ若シ其増加ガ主トシテ劣惡ナル人口分子ニ於テ行ハレタランニハ之レ決シテ國家ノ爲メニ賀ス可キコトニ非ラズ。否ナ一大害惡ナルハ云フマデモナシ。之ニ反シテ人口大ニ減少スルモ其減少ガヤハリ劣惡分子ニ於テ起ランニハ國民發展上甚ダ有益ナルコトモ亦疑フ可カラズ。サレバ人口ノ増加又ハ減少ハ普通ニ論ゼラル、如ク單ニ分量の見地ノミヨリ考察サル可キモノニ非ラズ。否ナ實質の見地ヲ主トシテ考察ス可キモノナリ。而シテタトヒ數ニ於テ減少スルモ質ニ於テ優良ナルモノヲ發達セシメントスルハ即チ現今ノ人種改良論或ハ國民改善論ノ主眼ナルナリ(例ヘバ Saleeby, Parenthood and Race Cultur, 1909, Chap. VI. the Growth of Individuality ヲ見ヨ)次ニ減少ノ度合ニ就テ考フルニ其度合甚ダ大ニシテ嘗ニ劣惡分子ニ於テノミナラズ、普通分子更ニ優良分子ニ於テモ多大ノ減少ヲ生ズル場合ニハ少クモ進歩ヲ停止セシムルノ結果ヲ見ルニ至ル可シト雖モ、現今ノ文明國ニ於テ適度ノ人口減少ノ起ルコトハ決シテ有害ナルコトニ非ラザルノミナラズ、却テ甚ダ望マシキコトナリ。クラッケンソープ氏ハ千九百七年ノ人口狀態ニ就テ、吾人ノ憂フ可キハ The defective

Numbers (數ノ缺乏)ニ非ラズシテ The Numbers of defectives (缺乏者即チ不具者犯罪者窮民等ノ多キコト)ナリト云フ警句ヲ吐カレタルガ(Crackanthorpe, Population and Progress, 1907)實ニ氏ノ言ノ如シ。數ノ缺乏ハ敢テ憂フルニ足ラズ、寒心ス可キハ實ニ缺乏者ノ増加ナルナリ。而シテ今此等ノ缺乏者ノ減少シ或ハ絶滅スルガ爲メニ人口減少シ來ルトセバカ、ル性質ノ人口減少ホド國家ノ爲メ、人類ノ爲メニ賀ス可ク祝ス可キモノナキニ非ラズヤ。又所謂缺乏者ノ増殖ノ爲メ優良分子ガ壓迫サル、ノ結果ヲ生ズルコトニ就テハ米國ニ關シテ既ニフランシス、エ、ウオーカー氏ハ左ノ如ク云ハレタルガ。

本國人口ノ増長ヲ妨害セシ諸原因ハ如何ナルモノナリシニモセヨ、彼等ハ生理的ノモノデナク、又氣候的ノモノデナカリシハ明カナリ。彼等ハ主トシテ社會的及ビ經濟的ノモノナリシナリ。而シテ其ノ内ニテモ主要ナルハ吾國人ヲシテ嘔吐セシムル程ナル生活標準ヲ携ヘテ無數ノ外國移民ノ侵入シ來レルコトナリキ Francis A. Walker, Discussions in Economics and Statistics, vol. II, P. 426.

近頃米國ノ有名ナル社會政策學者ヘンダーソン氏ハ更ニ此點ニ付テ左ノ如ク

說カレ居レリ。

劣惡ナルモノ及ビ不適ナルモノ The inferior and the unfit ノ競争ハ考ヘ深ク、將來ヲ慮ル人々ヲシテ其兒童數ヲ制限スルニ至ラシメシ勢力ナリ。……今ヤ望マシカラザル階級ノ過度ノ増加ハ高等ナル生活標準ヲ持スル人々ノ間ニ於テ人口原則ニ一大打撃ヲ與ヘントス。内亂以前ニ南部諸州ニアリテ奴隷ヲ有スヲ欲セズ又之ヲ有スル能ハザリシ人々ハ奴隷勞働ノ競争ヲサケ、手足ノ勞働ヲ賤ム念ヨリ來レル社會的壓迫ヲ免レン爲メニ北方ヘ移住セリ。サレド今ハ此ノ如キ道路ナシ。サレバ勝レタル才能技量ヲ備ヘ高等ナル生活標準ヲ持スル家族ハ自カラ縮少シ來レルナリ。此クテ順當的生活ヲ營ミ開明的生活標準ヲ固持スル人々ヲ獎勵シテ今ヨリモ一層多クノ兒童ヲ養育セシメンニハ此等ノ兒童ガ他日成人トナレル時劣等ナル移民ニヨリテ壓倒サル、憂ヒナキコトニ付テ現ニアルヨリハ一層良キ保證ガ政府ヨリシテ此等ノ人々ニ與ヘラレザル可カラズ。之レ移民反對論ニアラズ。唯開明的生活程度ノ要求ヲ發達セシムル見込ナキモノ等ノ移住ニ反對シテ云フノミナリ。今日ハ切リニ所謂簡易生活ヲ云フ人アリ。サレ

ト之レ野蠻生活ニ歸レト云フ意味ナル可カラズ。Henderson, Are Modern Industry, and City Life Unfavorable to the Family? American Journal of sociology, March, 1909.

更ニ人口ノ減少ガ非劣惡分子ニ於ケル減少ヲ含ム場合ニアリテモ其程度過大ナラザルニ於テハ決シテ有害ナラザル可シ。饑饉、戰爭、殘酷ナル競爭、階級爭鬭、多數人民ノ墮落兒童ノ濫費、女子ノ不健康、男子ノ低價等ヲ惡ム人々ハ適度ノ人口減少ヲ望マザルヲ得ザルナリ。

終リニ減少ノ速度ニ就テ考ヘンニ、若シ其速度急激ナランニハ社會諸機關ニ於ケル人口ノ分配ニ不足ヲ生ジ、爲メニ其運轉ニ調和ヲ缺キ、甚ダ有害ナル結果ヲ生ゼンガ、併シ其速度寛徐ニシテ人口狀態ト社會諸機關ノ適應破壊サレザルニ於テハ、其レガ爲メニ別ニ弊害ヲ生ズルコトナカル可シ。

今以上ニ述ベシ諸點ヲ心ニ留メテ、早晚人口減少ヲ起スナラント思ハルハ、出生率減少傾向ノ現狀ヲ考察センニ、先ヅ形質的方面ニ付テ見レバ此傾向ハ劣等分子ニ於テヨリハ寧ロ優良分子ニ於テ大ナルニ非ラザルカ、否ナ主トシテ優良分子ニ於テ行ハレツ、アルニ非ラズヤト疑ハル。英國ノ有名ナル「バイオオメリ」學者カー

ル、ピアソン氏 Karl Pearson ハ英國ニ於ケル此問題ニ付テ左ノ如ク云ハレタリ。

今ヤ吾人ハ五十年又ハ百年前マデニ於テナセシ如ク國民トシテ智能 *intelligence* ノ培養 *breeding* ヲ行ハザルニ至レリ。我國民中ニ於ケル優良種 *better stock* ハ以前ト同ジ割合ニ於テ増殖セズシテ、能力ノ劣リ元氣ノ薄弱ナル種ガ彼等ヨリモ一層多産的ナルナリ。而シテ假令國民教育ヲ一層汎ク普及シ或ハ一層充分ニ之ヲ施スノ策ヲ講ズルモ遺傳的ニ劣惡ナル智能ヲ遺傳的ニ強健ナル智能ノ水準ニ引上グルコトハ不可能ナル可ケレバ今若シ上述ノ現狀ヲ救済スルニ策アリトセバ、之レ唯優良種ト劣等種ノ出生率ノ相對的割合ヲ顛倒スルコトニ外ナラザルベシ。 *Biometrika*, vol. III, P. 159.

今ピアソン氏ノ考ヘラル、如ク今日見ル處ノ出生率減少ハ優良種ニ於テ起レルモノニシテ劣等種ニアリテハ却テ増加シツ、アルナラント云フ思想ハ汎ク學者ノ間ニ承認サレ來レルモノナリ。勿論統計上之ヲ精確ニ證明スルコト能ハズト雖モ、而モ先ニ述ベシ如ク出生率減少ノ傾向ハ教育アル階級、有資産者ノ階級、及ビ安易者ノ階級等ニ於テ行ハル、モノナルコトヨリ推測スレバ此思想ハ大體上

謬ナキモノト認ムルヲ得可シ。サレバ余輩ハ出生率ノ減少其物ニ付テハ敢テ憂ヒザレド、其行ハル、方面ガ優良分子ノ方面ナルヲ以テ人類ノ發達上甚ダ悲ム可キコト、考フルナリ。而シテ人種改良政策ノ主意ニ從ヒ先ヅ劣等分子ノ方面ニ於ケル出生率ノ減少ヲ圖ルハ今日ノ最大急務ナリト信ズ。次ニ出生率減少ノ度合ニ就テ考ヘンニ其最モ大ナル佛國ニ於テスラ未ダ憂フ可キ程度ニ達シ居ラズ。出生率ノ減少ニ係ラズ、死亡率ノ減少一層大ナルガ爲メニ人口總數ハ尙ホ多少ノ増加ヲ示シツ、アルナリ。更ニ獨逸ノ如キ國ニ於テハ増加率ニ於テスラ減少シ居ラザレバ其總數ニ於テ減少ヲ示スハ尙ホ遠キ他日ノ事ナラン。終リニ減少ノ速度ニ就テ見ルニ之レ亦急激ト稱スル程ニ非ラズ。之レガ爲メニ急激ニ人口ノ減少ヲ起スガ如キコトハ決シテナカル可シ。要スルニ現今ノ出生率減少ノ傾向ニ付テ世ノ悲觀論者ノ說ク處ノ弊害ナルモノハ眞實弊害ニ非ラザルカ、又ヨシ弊害トシテモ遠キ未來ニ於テ起ルヤモ計ラレズト懸念セラル、グラヒノモノニ過ギズ。而シテ其生起發達スル根本的原因ヲヨク理解スルトキハ此傾向ハ決シテ單ニ悲觀ス可キモノニ非ラズ、隨フテ又之ヲ無差別的不熟慮的ニ妨遏セントス可キモノニ非ラザル

コトハ明カナリト思フ。サレバ余ハ此傾向ニ對シテ採ル可キ政策ノ根本思想ハ「ゼ子チツクス」[Genetics]ノ原理ニ從ヒユーゼニツクス Eugenics ノ主意ヲ奉ジ、而シテ此傾向中ニ現ハル、處ノ現代人ノ新ニ得タル力卽チ任意ニ出生ヲ督制スル力ヲ利用シテ以テ人類ノ發展ヲ圖ルコトナリト信ズ。

「ゼ子チツクス」トハカムブリッヅ大學ノ生物學教授ベートソン氏ガ遺傳及ビ變易ノ研究ニ附セラレタル新名稱ニシテ氏ハ千九百八年ニ「The method and scope of Genetics」ト題スル一書ヲ著ハシテ斯學ノ一般ヲ說ケリ「ユーゼニツクス」トハヤハリ英國ノ大家ガルトン氏ノ新造語ニシテ氏ハ既ニ千八百八十三年ニ出版サレタル *Inquiries into Human Faculty* ニ於テ之ヲ用ヒラレタルガ其後氏ハマスコ其研究ヲ積ミ幾多ノ有益ナル著書論文ヲ公ニセラレタリ。而シテ近來一層盛ニ其研究ヲ唱道シ、且ツ自カラ巨額ノ資金ヲロンドン大學ニ寄附シテ其研究ヲ行ハシメ、更ニ *The Eugenic Education Society* ノ名譽會長トシテ大ニ同會ノ爲メニ盡クサレツ、アルナリ。而シテユーゼニツクストハ如何ナル研究ヲ稱スルモノナルカト云フニ近頃 *The Eugenics Review* ニ見ユル氏ノ最近ノ定義ニヨリテ之ヲ示サバ左ノ如シ。

「ユーゼニツクス」トハ身體的又ハ精神的ニ子孫 future generations ノ種屬の形質 racial qualitiesヲ改善又ハ傷害スル諸勢力 Agencies ニシテ社會的督制 Social Control ノ下ニアルモノヲ研究スルモノナリ。

ツマリ「ユーゼニツクス」トハ「ゼチツクス」ノ原理ヲ特ニ人類間ニ應用シテ人種改善ノ原則ヲ明ニシ、且ツ之ヲ實行スル方策ヲ工夫セントスルモノナリ。從來人種改良論ト云ヘバ一般ニ妄想家ノ夢ヲ説クモノト解セラレ識者ノ敢テ顧ミザリシ處ノモノナルガ、今ヤガルトン氏ノ「インスピレーション」ヲ受ケテ先ヅ英國ニ起リ夫ヨリ其他ノ諸國殊ニ獨佛米等ニ盛ナラントスル新シキ人種改良運動ハ大ニ之ト趣キヲ異ニシ嚴然タル學理ヲ基礎トシテ立チ、社會問題文明問題ヲ其根底ヨリ解決セントスルモノニシテ、余ハ第二十世紀ノ社會政策學ハ何レノ問題ノ研究ニ於テモ常ニ「ユーゼニツク」的精神ヲ以テ進マザル可ラズト信ズルナリ「ゼチツクス」及ビ「ユーゼニツクス」ノ二學問ニシテ充分ニ發達センカ、古昔ヨリ常ニ歷史上ニ繰リ返シ繰リ返シテ現ハル、一大事實即チ文明人ノ終極的衰頹及ビ滅亡ト云フ必然ニ文明人ノ蒙リ來リシ運命ハ全ク避ケラル、ヲ得テ、現代文明國民ハトコシ

ヘニ生キ且ツ盛ヘ行カン。斯學ノ天職實ニ大ナリト云フ可シ。

今「ユーゼニツクス」ハ先ヅ理論ノ部ト政策ノ部ニ分タル、ガ更ニ政策ノ部ハサ
リービ氏ノ說ニ從ヒ積極的「ユーゼニツクス」[positive Eugenics]消極的「ユーゼニツクス」
Negative Eugenics 及ビ豫防的「ユーゼニツクス」[preventive Eugenics]ノ三部ニ分ツヲ便宜
トス。積極的「ユーゼニツクス」ハ優良分子ノ保存及増殖ヲ圖ルモノニシテ消極的「ユ
ーゼニツクス」ハ劣惡分子ノ減少及ビ根絶ヲ圖ルモノ、而シテ豫防的「ユーゼニツク
ス」ハ微毒「マラリア」酒精鉛毒等ノ人種的毒物 racial poisons ノ害ヲ防ガントスルモノ
ナリ。Saleeby, the Methods of Eugenics, (Sociological Review, Oct. 1910) 併シ今日ノ狀態ニア
リテハ「ゼネチツクス」ノ原理未ダ確立セズ、隨フテ「ユーゼニツクス」ノ理論的部門ノ
研究ハ甚ダ幼稚ナル程度ニアルヲ以テ、積極的「ユーゼニツクス」ノ原則トシテガル
トン氏一派ノ人々ノ主張スルモノヲ直ニ實行ニ附センコトハ甚ダ危險ナリト雖
モ、消極的「ユーゼニツクス」ヤ豫防的「ユーゼニツクス」ノ方策中ニハ直チニ實行シテ
差支ヘナキモノ少ナカラズ。余ハ出生率減少ノ傾向中ニ現ハル、新シキ人間ノ力
即チ出生督制力ヲ利用シテ先ヅ消極的「ユーゼニツクス」ノ目的ヲ達セントスルコ

トハ今日ノ最大急務ナリト信ズ。平易ニ云ヘバ余ハ避妊法ヲ應用シテ先ヅ劣惡分子ノ根絶ヲ圖ラントスルモノナリ「ユーゼニツクス」論者ハ一般ニ避妊ヲ以テ罪惡ト考ヘ居ルガ如シト雖モ、之レ捕ヘラレタル倫理的的感情ニシテ、避妊ハ之ヲ善用スレバ實ニ人種改善ノ甚ダ有力ナル一手段トナルナリ。劣惡種ノ減少或ハ根絶ノ根本的手段トシテハ余ハ去勢及ビ避妊ヨリ勝リタルモノナシト信ズ。カノ結婚資格證明書制度ヤ遺傳的犯罪者及ビ窮民ノ結婚ヲ禁止スル制度ノ如キハ充分ニ實效ヲ奏スルモノニ非ザル可シ。

余ハ此問題ニ付テ尙ホ論ゼント欲スル點多シト雖モ、近來大ニ健康ヲ害シ醫師ヨリ日常ノ講義以外ニ餘分ノ研究ニ力ヲ勞スルヲ禁ゼラレ居ルヲ以テ今回ハ以上論ゼシ處ニ止メ、他日機會ヲ得バ再ビ詳論スルコトハセン。

尙ホ終リニ以上ノ所說ノ主意ヲ掲ゲ置カン。

(1) 出生率減少ノ傾向ハ無制限ニ進ムモノニ非ラズ。社會的及ビ倫理的勢力ノ作用ニヨリテ此傾向ニ自カラ一定ノ限界成立ス可シ。

(2) 而モ此傾向ハ遂ニ人口ノ減少ヲ起ス可シ。

(3) サレド人口ノ減少其物ハ害惡ニ非ラズ更ニ其結果ハ總テ有害ナルモノニ非ラズ。有益ナルモノモ多シ。

(4) 「ゼニチツクス」及ビ「ユーゼニツクス」ノ原則及ビ主意ニ從ヒ出生率減少ノ傾向中ニ現ハル、勢力及ビ此傾向其物ヲ利用シテ人種的改善ヲ圖ラザル可カラズ。而シテ今日ノ處デハ先ヅ劣惡分子ノ減少及ビ根絶ノ方面ヨリ進ム可シ。

(5) ツマリ此傾向ハ現代文明ノ性質上當然起ル可キモノナレハ唯之ヲ悲觀スルモ益ナク、又之ヲ無差別的ニ禁遏セントスルモ效ナシ。ヨロシク此傾向ヲ規制^{レギメント}シ利用シテ以テ人種的改善ヲ圖ル可シ。

而シテ人種的改善策ハ社會政策ノ根本ヨリ。始メテ「ユーゼニツクス」ヲ學バントスル人ハ先ヅ Saleeby, The Parenthood and Racial Culture 1909 ヲ閱讀セラル可シ。同書附録ニハ重要ナル參考書ヲ舉ゲ且ツ簡單ナル説明ヲ附セラレル。而シテ斯學ノ新研究ニ注意センニハ The Eugenic Review, The Sociological Review, Archiv für Rassen- und Gesellschaft-Biologie, Politisch-Anthropologische Revue 等ヲ見ラル可シ。